

「心配するのはやめなさい」

ルカの福音書 12:22～32

はじめに

今日の御言葉はクリスチャンの信仰生活に適用されるものとしてよく用いられ、語られているものです。一羽の鳥や野の草花さえも養われる神を信じて、悩んだり恐れたり、心配したりするのはやめましょう、というような説教、メッセージは今日もなお多くの教会で語られています。私もそのような御言葉に何度も教えられ、励まされてきました。しかし聖書の御言葉は私という一個人の存在、その人生の中だけに適用され、それで完結するものではありません。聖書とは、終わりの日に起こる神のご計画を記した預言書でもあるのです。その計画とは、永遠にわたる、天と地と地の下にまでおよぶ極めて壮大、遠大なものであり、決して一個人の人のうちで納まってしまうような小さなものではないのです。ですから私は聖書をそのような書物として解き明かしてまいります。

今日の御言葉の解き明かしを聞いて、おそらく皆さんは多少なりとも混乱することでしょう（かく言う私もはじめはそうでした）。あるいは理解できないとしてこれを否定、拒絶されるかもしれません。しかしそれは私たちの視点、神に対する今の理解が、神が持っておられるその本来のものから大きく的外れ、かけ離れているために生じるものであることを覚えていただきたいのです。つまり、今日の解き明かしを聞いて「難しい、意味が解らない」と感想を述べられるのは結構ですがそれは「私の視点、考えは神とは違います。同意できません」と言っているようなものだということです。今日、あえてはっきり申し上げましょう。聖書はあなたの心配事や悩み事を解決するための辞書、教科書、参考書ではありません。またあなたの疑問や質問にわかりやすく親切丁寧に答えるように記されたものでもありません。聖書は神のご計画が秘められた「神の国の奥義」として記された預言書です。そしてそれは私たちの理解の度合いに関係なく、受け入れようが受け入れまいが、信じようが信じまいが一切関係なく、すべて必ず成就、実現します。その秘められた奥義について今日も語ってまいります。聖霊の助けがありますように。

1. いのちとからだ

ルカの福音書【新改訳 2017】

12:22 それからイエスは弟子たちに言われた。「ですから、わたしはあなたがたに言います。何を食べようかと、いのちのことで心配したり、何を着ようかと、からだのことで心配したりするのはやめなさい。

12:23 いのちは食べ物以上のもの、からだは着る物以上のものだからです。

「いのちのことで」また「からだのことで心配したりするのはやめなさい」とイエシュアは言われました。この「いのち」と「からだ」は私たち人がこの地上で存在、生きるうえでどちらもなくてはならないものです。誰かこの中に「いのち」は持っているけど「からだ」はありません、という人はいますか？あるいはその逆に「からだ」だけという人はいますか？…いませんよね。「からだ」がなければそれは存在しているとは言えません。しかしそこに「いのち」が宿っていなければそれは死体であり、生きて存在しているとは言えません。つまりこの「いのち」と「からだ」は二つで一つ、一対の状態ではじめて存在しう

るものだということです。ここまでは理解できますか？ここからが本題です。しかしこの「いのち」と「からだ」とは私たちが抱いている概念とは大きく異なるものを指し示しています。

まず「いのち」とは何でしょう、聖書はこの中に一体何を指し示しているのでしょうか。これを知るには原語であるヘブル語のその最初の言及に目を留めなければなりません。この「いのち」のことをヘブル語でネフェシュ(נֶפֶשׁ)といい、その初出箇所は以下の記述です。

創世記【新改訳 2017】

1:20 神は仰せられた。「水には生き物が群がれ。鳥は地の上、天の大空を飛べ。」

1:21 神は、海の巨獣と、水に群がりうごめくすべての生き物を種類ごとに、また翼のあるすべての鳥を種類ごとに創造された。神はそれを良しと見られた。

1:22 神はそれらを祝福して、「生めよ。増えよ。海の水に満ちよ。鳥は地の上に増えよ」と仰せられた。

1:23 夕があり、朝があった。第五日。

これは神の天地創造の御業の第五日についての記述です。ここで「生き物」「水に群がりうごめくすべての生き物」と訳されているのが聖書で最初のネフェシュです。これもまたただの「海の」魚介類と捉えてしまいがちですが、聖書においてこの「水」は「茫漠（創 1:2）」すなわち混沌として全てがごちゃ混ぜになり混乱があり区別のつかない世界を指し、また「奔放、ずうずうしい（創 49:4）」存在としても表されおり、そしてその集合体である「海」は、以下の預言で用いられています。

ヨハネの黙示録【新改訳 2017】

12:12 それゆえ、天とそこに住む者たちよ、喜べ。しかし、地と海はわざわいだ。悪魔が自分の時が短いことを知って激しく憤り、おまえたちのところへ下ったからだ。」

13:1 また私は、海から一頭の獣が上って来るのを見た。これには十本の角と七つの頭があった。その角には十の王冠があり、その頭には神を冒瀆する様々な名があった。

16:3 第二の御使いが鉢の中身を海に注いだ。すると、海は死者の血のようになった。海の中にいる生き物はみな死んだ。

20:13 海はその中にいる死者を出した。死とよみも、その中にいる死者を出した。彼らはそれぞれ自分の行いに応じてさばかれた。

このように、「海」とは「悪魔」「獣（海の巨獣）」「死者」の世界を指し示しているのです。つまり「水に群がりうごめくすべての生き物」と訳されたネフェシュ、本来の「いのち」とは悪魔の世界、悪の支配、罪と死に捕らわれている存在を指し示しているのです。そのような、危機的状況、絶望的な状態に置かれている存在とは何でしょう、誰でしょう。その答えはこの「いのち」と対をなす「からだ」に秘められています。

「からだ」、この言葉は先の「いのち」以上に文字通り、字義通りに理解してしまいやすく、その概念に捕らわれてしまう言葉です。からだ、身体、肉体、ボディ、何とわかりやすい言葉でしょう。この偏見、先入観、固定概念を覆すのはかなり困難です。しかしこの「からだ」を意味するヘブル語のガフ(גוף)は本来、そのような意味とは全く異なる意味で用いられていました。

出エジプト記【新改訳 2017】

21:1 これらはあなたが彼らの前に置くべき定めである。

21:2 あなたがヘブル人の男奴隷を買う場合、その人は六年間仕えなければならない。しかし七年目には自由の身として無償で去ることができる。

21:3 彼が独身で来たのなら独身で去る。彼に妻があれば、その妻は彼とともに去る。

これは神である主が預言者モーセを通して彼の民「ヘブル人」とも呼ばれるイスラエルの民に対して定められた掟、律法の一つです。ここで「独身」と訳されているのが聖書で最初のガフ、本来意味するところの「からだ」です。そしてこの言葉は「ヘブル人の男奴隷」、奴隷となったイスラエル人を指しており、またそれは「六年間仕え…七年目には自由の身と」なることが定められているとあります。これは単なるルール、法律のようなものではなく、これもまた神のご計画を指し示す「型」となっているのです。つまりそれは神の選びの民であるイスラエルの民、ヘブル人、ユダヤ人とも呼ばれる彼らが、七年目に奴隷の苦しみから解放され、自分たちの土地に帰され、国が再興され、その御国は終わることがない、という形で成就します。つまり「からだ」と訳されたガフには奴隷から解放されるヘブル人、イスラエルの民の存在が指し示されているのです。

ですから先ほどの「いのち」と、この「からだ」すなわちヘブル語のネフェシュとガフに秘められた神のご計画を組み合わせると次の事実に結びつきます。やがて黙示録の「獣」と呼ばれる反キリスト、悪魔の子、不法の子、偽メシアが地上に現れます。彼は世界を支配し、自らを神とし、ユダヤ人を根絶やしにしようとしています。その時代は「患難時代」と呼ばれ、その期間は七年であると言われていました。その終わり、つまり七年目には神の御子イエシュアが地上再臨され、この獣を滅ぼし、イスラエルを解放し、救い出し、そして彼らの王となり、国を再興されるという神のご計画の成就、完成となるのです。今日の箇所
の結論は、後述します「御国を求めなさい」というものです。ですからこの「いのち」と「からだ」がその「神の国、御国」がどのようにして起こるのかということが指し示されているとしても何ら不思議なことではなく、むしろ自然なことであり文脈に則しているのです。それを私たち一人の健康や生活のことに当てはめる方が実はよっぽど無理があるのです。このように神はすべての終わり、完成に目を留め、常に誰よりご自身が「御国を求め」ておられるのであり、私たちの今のささやかな人生を少しでもより良くしようといろいろと教え導くことに情熱を傾けておられるのではないのです。「では今はどうでもいいのか、神は私のことなどどうでもいいのか」などとつぶやく前に、あなたのその視点が神のそれから大きくズレてしまっている現実を自覚し、神が見ておられる、求めておられるものを同じように見て、同じように求めることを求めようではありませんか。

2. 烏と草花

ルカの福音書【新改訳 2017】

12:24 烏のことをよく考えなさい。種蒔きもせず、刈り入れもせず、納屋も倉もありません。それでも、神は養っていてくださいます。あなたがたには、その鳥よりも、どんなに大きな価値があることでしょう。

12:25 あなたがたのうちだれが、心配したからといって、少しでも自分のいのちを延ばすことができるでしょうか。

12:26 こんな小さなことさえできないのなら、なぜほかのことまで心配するのですか。

イエシュアはここでなぜ「烏（からす）」をたとえに挙げられたのでしょうか。種蒔きも刈り入れもしないという点で言えば人以外のほとんどすべての生物がこれに該当します。しかも生物学的には烏は非常に頭の良い生き物で自分の餌を百か所以上の場所に隠してもそれをすべて憶えているようで（by 旭山動物園）、つまり刈り入れて倉に納めることができます。ではイエシュアはちょっと間違われたのでしょうか。そうではありません。これもまたヘブル語で解釈する必要があります。この「烏（からす）」のことをオーレーヴ(אֲרֵב)といいます。この言葉は「夕、夕方」を意味するエレヴ(עֶרֶב)と綴りが同じであり、その黒い翼の色からしてこのエレヴがオーレーヴの由来となっていると考えられます。夕方、エレヴは暗い夜、まさに烏の色のような黒い闇の始まりを意味する言葉です。この夜に種を蒔いたり、刈り入れをしたりする農夫がいるでしょうか。イエシュアは他の箇所でもこのように預言しておられます。

ヨハネの福音書【新改訳 2017】

9:4 わたしたちは、わたしを遣わされた方のわざを、昼のうちに行わなければなりません。だれも働くことができない夜が来ます。

エレヴ、夕方になれば夜が来て、種を蒔くことも刈り入れをすることも納屋や倉に納めることもできなくなり、まさに「だれも働くことができない夜が来ます」。イエシュアのこの預言は先ほどの「患難時代」が来ることを指し示しており、反キリストの支配による暗闇の圧政の時代を指し示しているのです。しかし、そのような苦境の中にあっても、イスラエルの民は、正確にはイエシュアを信じて待ち望む「イスラエルの残りの者」と呼ばれる人々は守られ、「それでも、神は養っていてくださいます」というたとえが成就します。ここに使われている「養う」という意味のヘブル語クール(קָוַל)は本来、激しい飢饉の中でも食糧があり、養われるという意味の言葉であり（創 45:11）飢饉の中では農作物が育たないのでこれもまた「だれも働くことができない」という状況を指しています。しかし「それでも、神は養っていてくださいます」とイエシュアは言っておられるのです。このように、この烏のたとえもまたイスラエルに対する神のご計画が指し示されており、それは決して私たちが仕事をしなくても神が食べ物を下さるというような意味のものではないということをぜひ知ってください。

しかし神のご計画が私たち人の働き、仕事によって成し遂げられるものでもないということも事実です。「あなたがたのうち…自分のいのちを延ばすことができるでしょうか。」これは直訳では「自分の身長を1キュビトでも伸ばせるか」となります。1キュビトは約46cmです。自分の意思でこれはまず不可能です。このように神のご計画は人の側の力では絶対に不可能であり、というよりもむしろ弱い私たち人の力を必

要としません。これらはすべて神の御業によってのみ成し遂げられます。すなわち神の御子イエシュアによって成し遂げられます。そしてそれらは聖書に記された、秘められたとおりに成就され、滞ることも妨げられることもなく、一切心配ご無用、「心配したりする」必要がないのです。

3. 栄華を極めたソロモン

ルカの福音書【新改訳 2017】

12:27 草花がどのようにして育つのか、よく考えなさい。働きもせず、紡ぎもしません。しかし、わたしはあなたがたに言います。栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほども装ってはいませんでした。

12:28 今日は野にあって、明日は炉に投げ込まれる草さえ、神はこのように装ってくださるのなら、あなたがたには、どんなに良くしてくださることでしょう。信仰の薄い人たちよ。

このたとえも先ほどの鳥のとえを言い換えたもので意味はほとんど同じです。つまり「働きもせず、紡ぎも」しない「炉に投げ込まれる」「草花」を「神は…装ってくださる」ように、「患難時代」という「炉に投げ込まれる」イスラエルの残りの者を「神は…装ってくださる」すなわち養い、滅びないように守ってくださり、そこから救い出してくださいというイエシュアの地上再臨による神のご計画が指し示されているのです。そしてそれによって建てられる御国は「栄華を極めたソロモン」の王国をはるかに凌ぐほどのものであるということが補足されているのです。神はこのような「神の国、御国」を建てられることによって私たち、すなわち「あなたがたに…どんなに良くして」あげようと言っておられるのです。何度も言いますが、神はこの世の終わりに御子イエシュアによって建てられる御国を見つめ、これを目指しておられます。ですから私たちの今の生活をより良くしてあげようと言っておられるのではなく、御国を建てることによって私たちをもそこに住まわせ、そこで養い、「栄華を極めたソロモン」をも上回る装いをもって祝福しようとしておられるのです。どうぞあなたのその信仰の矛先を、今の自分の生活からやがて来る御国に向けてください。

4. 御国を求めなさい

ルカの福音書【新改訳 2017】

12:29 何を食べたらよいか、何を飲んだらよいかと、心配するのをやめ、気をもむのをやめなさい。

12:30 これらのものはすべて、この世の異邦人が切に求めているものです。これらのものがあなたがたに必要であることは、あなたがたの父が知っておられます。

12:31 むしろ、あなたがたは御国を求めなさい。そうすれば、これらのものはそれに加えて与えられます。

12:32 小さな群れよ、恐れることはありません。あなたがたの父は、喜んであなたがたに御国を与えてくださるのです。

このように、イエシュアの結論は「御国を求めなさい」となっており「あなたがたの父は、喜んであなたがたに御国を与えてくださるのです」という、まさに「御国の福音」で締めくくっておられます。ではこの「御国」とも「神の国」とも呼ばれるそれは何か、誰が、いつ、どのようにして建て、そしてどのような国となるのかということを書いてあるものがこの聖書であり、今日もその一つから「御国」について

語りました。これからも私自身これをひたすら求めてまいります。ちなみにこの「求める」という意味のダーラシュ(טַרַשׁ)は本来、人ではなく「神が血を求める(創9:5)」という意味のヘブル語で、それは食物や品物を買ったり交換したりするようなショッピング感覚のような求めではなく、血すなわち「いのちのやり取り」いのちをかけて求めるような、そんな真剣勝負のような行為を指すのです。つまり神はこの「御国」に対して常に真剣、まさにいのちがけ、必死の形相であり、その完成、成就を目指して常に全力、全身全霊を傾けておられるのです。御子イエシュアもこう言われました。

ヨハネの福音書【新改訳2017】

5:16 そのためユダヤ人たちは、イエスを迫害し始めた。イエスが、安息日にこのようなことをしておられたからである。

5:17 イエスは彼らに答えられた。「わたしの父は今に至るまで働いておられます。それでわたしも働いているのです。」

このように、父なる神も御子イエシュアも一時も休むことなくとどまることなく安息することなく今も働き続けておられるのです。この「御国」に対する神の並々ならぬダーラシュ、真剣な求めを今日、ぜひ覚えていただきたいです。そして求めていただきたいのです。求める者は必ず与えられます。最後にもう一度言います。「小さな群れよ、恐れることはありません。あなたがたの父は、喜んであなたがたに御国を与えてくださるのです。」アーメン！